

「生産性」という言葉の罨

「賃金のこれ以上の引き上げには、生産性の向上が欠かせません」

賃上げの議論において、識者が語るこのフレーズは定番となっている。

「生産性」という言葉には、私たちの思考を縛る「罨」が潜んでいる。日常的な文脈において「生産性」は、「短時間で多く作る」といったスループットの増強と捉えられがちだ。「ものづくり」を意味する「生産」の語意に引きずられ、量的な生産拡大=生産性向上、という錯覚に陥ってしまう。

経済学における生産性は、物量ではなく「付加価値をどれだけ生み出したか」に集約される。

下の数式の分母である「労働投入量」を担い、現場で勤勉に汗を流すのは、最も重要な経営資源である従業員の役割だ。その貴重な経営資源を、どの市場へどのように投入し、分子の「付加価値額」を最大化させるか。この舵取りが経営者の役割であり、本号の特集テーマ「稼ぐ力」の核心である。

従業員には「地道な改善」はできる。付加価値額を「飛躍させる改革」は、経営者にしかできない。

本号では、3社の経営者によるAIと人的資源投資をテーマにした座談会を企画した。研究員による各論文では、自社の市場と提供する価値を再定義して付加価値を積み上げてきた、地元企業の具体的な事例を多数お示ししている。

この特集が、読者の皆さまの「付加価値」向上、そして賃上げを通じた地域経済の力強い歩みに繋がれば幸いである。

■ 企業が労働生産性を向上させるための取り組み

